ホームレス問題の過去と現在とそして「未来」

今回の「ネットカフェ利用者」および「自立支援センター入所者」を対象とした聞き取り調査の報告を読みながら、「ホームレス問題」ひいては「貧困問題」の構図が、その基本的なところで大きく変化しつつあるのではないか、ということを強く感じました。もちろん、これによって問題の新たな構図がすべて明瞭に見えてきたというわけではもちろんないのですが、それでもここに記録されている人びとの苦境を丁寧に読んでいくと、そこからは、問題の新たな構図の大まかな輪郭は見えてくるような気がしています。

ところで、今回の調査の対象者は、旧来の「ホームレス問題」において主として語られてきた人びと、すなわち「寄せ場」の失業日雇い労働者や、その寄せ場を追われてホームレス状態を余儀なくされている人びとではありません。そうではなく、近年急激に不安定化しつつある雇用状況と、拡大する社会の不平等化の趨勢のなかで、多様なかたちで姿を現しはじめた不安定就労者であり不安定居住者が、しかもそのなかの相対的に「若い」人びとが、調査の対象者です。このように、対象者の社会階層的な背景や属性がかなり異なっているのですから、調査の結果から見えてくる問題の構図もまた大きく異なると予想されるのですが、そして事実、その個別的な苦境や困難の様相は大きく違っているのですが、しかしもう一方では、両者に共通する側面が少なくないことも調査結果からは読み取れます。

その表層的な違いにもかかわらず、両者の間には通底する構造的な要因がある、両者（とその抱えている問題）が結びつくことを不可避とするような社会の仕組みがつくられつつある、これが調査報告を読んでの最大の印象でした。この印象を、きわめて大雑把にではあるのですが、述べてみたいと思います。

隅谷三喜男は、すでに 1960 年代の初頭において、日本の高度経済成長とともに顕著となってきた労働者階級の「『中間層』化現象」について論じた際に、「労働者も全体として見れば、寡占体制下に包摂されて、その間の対抗関係は表面化しえないでいる」と述べつつ、しかし同時に、この「寡占体制」の枠組みからあらかじめ排除された労働者部分もまた存在している、ということに注意を促していました。

> もっとも、労働者のなかで、日雇・臨時工と呼ばれ、「他に分類されない単純労働者」と呼ばれている層は、その消費水準の低さにも示されるように、「中間層」化しえない、やや異質的な存在である。その矛盾の集中的な表現が釜ヶ崎の騒擾というような姿をとるのである。それは寡占体制の枠のなかに入れない都市雑業層の底辺部分なのである。この層は高度成長の過程で良質の労働力を吸いあげられ、中高年層を中心とする停滞的過剰人口として、むき出しの姿を示している。

この「寡占体制」の外部にあって、そして外部にあることによって資本主義経済のメカニズムにむき出しでさらされ、「良質の労働力を吸いあげられ」た挙句に廃棄されてしまった（はずの）「やや異質的な」労働者層（の「残骸」）が、突如、1990 年代後半期に「亡霊」のように日本の大都市の中枢部に大挙して姿を現した、おそらくこれがいわゆる「ホームレス問題」の出発点でした。

青木秀男は都市下層のひとつの結集点あるいは集約点ともいうべき「寄せ場」が、「社会的に隔離された陸の孤島」として存在してきたことを指摘し、また西澤晃彦は戦後の国民国家による「隠蔽的介入」によって都市下層が「ホームの空間から排除された人々の受け皿として制度化」された「不可視化された空間」へと囲い込まれてきたと述べています。これが、「総中流化」社会（実際は決して「総」ではなかったのですが）の成立の裏面としての都市下層（あるいはこれを「不定住的貧困」あるいは「アンダー・クラス」等々と呼ぶこともできるでしょう）の排除（= 包摂）と不可視化という事態です。

そしてこのような都市下層（民）の排除・隔離と不可視化の社会的仕組みは、ただ単に過剰人口の搾取と管理のためという経済的あるいは治安上の理由からのみ要請されたのではなく、それと同時に、戦後の「豊かな社会」日本のリアリティをその最も基底的なところで、すなわち人びとの日常の生活感覚において、担保するためにも必要不可欠であったのです。高度経済成長を支えた「寡占体制」の成立と存立は、下層「貧民」の排除（社会の周辺部への封じ込め）とその隠蔽（不可視化）によって初めて可能となったのです。そして、この「豊かな社会」の「汚物」は厳重に封印・管理されなければなりませんでした。市村弘正は、「『貧民』の視界からの脱落」という表現によって、寡占体制（「日本型」フォーディズム体制）下における人びとの日常的な社会認識の下限に引かれた境界線の存在に注目を促して、この境界線の内側に自足してその外側にいる者たちを「異物」と見る（というよりもそもそもにおいて「見ない」）人々の「感覚態度」こそが「豊かさ」の実感なのだと指摘したのですが、こうした日常的社会認識の限界を画する境界線を踏み越えないことによってのみ私たちの日常の「安楽」があった、ということなのです。このような事態をまた渋谷望は「ミドルクラスのトラウマ」と表現しているのですが、この「排除」に付随する「トラウマ」こそが、後の「ホームレス問題」の大衆レベルでの受容のかたちを規定していたのではないでしょうか。

それにもかかわらず、すなわちその厳重な封印にもかかわらず、それ（都市下層）は図らずも 1990 年代後半の「今頃になって」あからさまに（ホームレスというかたちで）露出してしまったのです。この事態は一体何を意味しているのでしょうか、そしてどのように解釈されるべきなのでしょうか。端的に言えば、現在の私たちの社会においてホームレスとは「亡霊」のような存在です。無用化され、行き場を失い（奪われ）、さりとて葬られることもなく放り出された労働者（の「残骸」）です。たんに「ホーム」がないのではなく、彼らが「正当に」存在することのできるいかなる「場所」も今の社会の中にはない、そのような存在です。それゆえ、ホームレスを「排除された者」と（のみ）見るのでは不十分です。なぜなら、「排除」は決してその生存の場所そのものを奪ってしまうのではないのですから。どこか「外」に「場所」が用意されて初めて「排除」は可能になります。しかし、現在のホームレスにはその排除されて隔離されるべきそのような「場所」さえありません。それゆえ、彼らは都市を彷徨うしかないのです。このことは、つい先頃、大阪市によって強行された釜ヶ崎労働者の「住民票抹消」という事態のうちに如実に、また象徴的に、示されているのではないでしょうか。

現段階における根本的な問題（困難）は、ホームレスを「包摂 = 排除」するための「特別な場所」（すなわちホームレスのための「ホーム」）を私たちの社会がもはや確保できない（のではないか）、ということです。現在の私たちの社会はもはや（彼らを「帰還」させるべき）「寄せ場」を必要とはしていないし、またその他の「特別な」社会空間を彼らのためにリザーブしておくような余裕もありません（というよりもむしろ、かつて下田平が指摘したように、私たちの社会総体が「寄せ場」化しつつあると言うべきなのですから）。「排除 = 包摂」が可能となるためには何らかの「特別な場所」が必要なのですが（「寄せ場」「福祉施設」「老人ホーム」「刑務所」等々）、その確保がもはや不可能なのであれば（そしてネオリベ的な「自由競争」と「自己責任」のロジックからすれば、そのような「古い」既得権によって守られた「特別な

空間」などは存在の余地はないのです)、ホームレスは都市のまっただ中に晒されて居座るしか「生き延びる」途はないということになります。そして、事実そのようになりはじめているのです。

このことはホームレスの「自立支援」という国家主導による「包摂」の試みの「失敗」によっても明らかです。過去5年間にわたって進められてきたこの「ホームレスの自立支援」策をどのように総括し、「評価」するのかということに関しては、その問題の多面性や複雑性に規定されて、一言で結論付けてしまうことはできないのですが、しかし少なくとも、「ホームレスの就労自立」というその「本来の」意図もしくは「明言された」意図という点からすれば、それは明らかに「失敗」であったと言わざるをえません（もちろんそこには「意図せざる効果」もあったのですが、これについての「評価」はまた別の問題です)。一方では、ホームレスに「自立」を促しつつも、しかし他方での彼らを「受け入れる」ための「場所」を私たちの社会の中に確保できないままに、「自立支援体制」の5年間が経過してしまいました。「自立」への出口（具体的には仕事と住居、そして社会関係を取り結ぶことを可能とする「場所」）を確保するアテのないまま、机上で計画されたホームレスの「就労自立」などというものは、最初から「絵に描いた餅」でしかなかったのです。その結果もたらされたものはと言えば、ホームレス（のコア部分）のホームレスとしてのさらなる固定化とその＜亡霊＞化です。

ホームレスの「自立支援」の試みは、その支援を「与える側」と「受ける側」の双方から拒否された（されつつある）のではないかと見えます。一方には、実効を伴わない「支援」を拒否し、むしろホームレスとして「自立」し、まさしく「自己責任」において都市のなかで何とか生き延びようと日々努力するホームレスが出現し、その数を増しつつあるという傾向がうかがえます。そしてもう一方では、「市民レベル」でのホームレスへの「拒否」「反発」「嫌悪」等々の感情の肥大化とそれをベースとした「厳しい世論」の形成という流れも確かにあります。かつてのホームレスを「かわいそうな人たち」「社会の犠牲者」と見て、「福祉の対象」とするような市民の「温かな」まなざしは確実に弱まっています。少なくとも「支援」を拒否している（ように見える）頑固なホームレスへの市民や世論の視線は厳しくなっています。こうした状況の中で、都市の中枢部に「停滞」「沈殿」するホームレス（層）が無視できないボリュームで生み出されてきたのです。厚生労働省も昨年のホームレスを対象とした全国実態調査でこの事態を一定程度は認識したようですが、しかしその報告書を読む限りでは、このような事態の背後に潜む私たちの社会総体の趨勢と関連づけてこの事態の意味を読み取ろうとする姿勢は希薄なようです。

寄せ場という「特別の場所」を奪われてしまったホームレスにとって、その生きのびるための場所は都市の隙間しか残されていません。たとえその存在様式が不法あるいは非合法的なものであり、またその「行く末」が無残な路上死であったとしても、そうなのです。そして、寄せ場を追われた「旧来の」ホームレスが自らの居場所を「確保」しようとしているこの都市の隙間空間は、同時に現代の「新たな」貧困層がたどりつく場所でもあるということ、このことが今回の調査から徐々に見えてきました。資本によって地ならし的に再編成された（されつつある）都市空間に、もう一つの不可視の社会空間（「貧者の領域」）が形成されつつあるかのようです。寄せ場の解体は都市総体の寄せ場化という状況をもたらし、そしてこの寄せ場化した都市のここかしこに姿を現しはじめた「小さな寄り場」で新旧の「亡霊」が出会い、混ざり合うという事態がうみだされつつあるように見えます。

> ･･･ポストフォーディズムの時代にあっては、かつて支配諸国の労働者階級の多くの部門が当てにできた安定し保証された雇用は、もはや存在しない。労働市場の柔軟性と呼ばれるものは、どんな職も確実ではないということを意味する。今や雇用と失業の明確な境界は消滅し、すべての労働者がその間を不安定な形で行ったり来たりするというグレーゾーンが大きく広がっているのである。

ここでネグリ & ハートが指摘しているのは、「寡占体制」（= フォーディズム）という私たちの「幸福」の基盤が、あるいはこれまで私たちの「『豊かさ』における一体感」を支えてきた「こちら側」と「あちら側」を分ける強固な「境界」が、完全に消滅した（あるいは奪われた）という事実であり、それにかわって私たちの眼前に広がり始めたのが、「貧者の領域」へと文字通りボーダレスに繋がっていく、多分に「不安」と「恐怖」に満ちた「グレーゾーン」である、という状況です。そして、このグレーゾーンとしての都市空間においてホームレスという「古い」下層は「新たな」それと融合しつつ「深い貧困」層（あるいは「固定的貧困」層）を形成しつつあるのです。

この 2 年ほど、いわゆる「格差問題」の延長線上で、「若年」の不安定就労者（派遣労働者やパートタイマー、アルバイターなど）や不安定居住者（マスコミ用語でいえば「ネットカフェ難民」に象徴されるような定まった「住居」を喪失した人びと）の存在がにわかに注目を集めて、社会問題化し始めているのですが、こうした都市の「新たな」貧困層と、主として寄せ場（釜ヶ崎）を給原とする「古い」都市下層が、ボーダーレスに拡大しつつある都市の「貧者の領域」で遭遇し、混ざり合い、融合しつつあると見えます。ネットカフェ、24 時間営業のファストフード店、サウナやカプセルホテル、自立支援センター等の施設、派遣労働の寮や飯場、公園、街路、そして建設現場や工場といった労働現場、現代の「ミニ寄せ場」ともいうべきこうした場所で両者は混ざり合いはじめています。新旧の貧困者の主観的な意識や認識においては、かならずしもこのことが自覚されてはいないかもしれませんが、しかし実態のレベルではこの融合は否定できないようです。少なくとも今回の調査からはそう言えます。またこうした現象は、かつての隔離空間であった釜ヶ崎でも見られるようになったとも聞き及んでいます。旧来の境界を越えて融合し始めた「新たな」ホームレスの出現です。

労働市場の分断とその階層化によって支えられてきた「豊かな社会」（= フォーディズム体制）は完全に終焉を迎え、それによって社会的な対立と矛盾の構造はその姿を変え、またその現れ方も変化してきています。岩田正美は（崩壊しつつある？）中流（下）層の＜不安＞が開示する可視的「問題」領域（ここは行政の「包摂」策や市民団体の「支援」策が一定の効果を発揮する問題領域でもあるのですが）に覆い隠されるようにして拡大・深化しつつあるより深い「問題」領域への注意を促しているのですが、「新たな」ホームレスはまさに、この深い領域におけるコアとして形成され始めているのではないでしょうか。危機の本質はホームレスの「量」にのみあるのではありません。その「質」と「深さ」にこそ注目されるべきです。中間層（ミドルクラス）の「不安」のように容易には回収・包摂できない問題と危機の領域が、そこには姿を現しつつあるのです。

現在から振り返るならば、1990 年代の中頃から社会問題化した「ホームレス問題」は、いわば「豊かな社会」日本の「終りの始まり」であったと言うことができます。それから 10 年以上を経過した現在、私たちは徐々に、この「豊かな社会」の後に続く社会のありようをおぼろげながら垣間見ることができるようになってきました。そこでは、もはやかつての「分厚い中間層」は存在しえないであろうし、それゆえそうした中間層の存在によって支えられていた「社会の安定」もきわめて不確かなものとなるだろう、と予想されます。当然にも、社会的な「寛容」の幅はますます狭まり、また社会的な不安の高まりによって引き起こされる「治安（セキュリティ）」意識の上昇にも規定されて、ホームレスはかつて以上に「危険な」存在として敵視・迫害・抹消される可能性さえあります。さらには、「問題人口」としての「新たな」ホームレスは、もはやかつてのように社会のある特定の隔離された空間（寄せ場）から姿を現すのではなく、その「給源」は広く社会全体（の下方）に拡散しているのですから、旧来の局所的な封じ込めを基本とする社会政策のさまざまな手法はほとんど役にたたないと予想されます。

こうした「予想される」状況に対して、私たちはどのように対応すべきなのでしょうか、おそらくこの

ことが早急に議論されなければならない最も重要な課題です。現状においては、新旧二層の（顕在的・潜在的）ホームレスは、その社会的背景や「給原」の違いなどに規定されて、問題の認識や対抗的な運動のための「共通の」基盤を確立しえてはいません。また「問題」の現象形態やその深刻度における「地域差」も小さくはなく、このことも状況をトータルに把握することを難しくしている一要因です（特に東京と大阪では「寄せ場」の状況においても、また「若者」の置かれている困難な状況においても、かなり大きな違いがありそうです）。こうしたさまざまの「違い」を超えて、「新たな」ホームレス（都市下層）問題の「構造」をただしく認識し、その認識に基づいて、これも「新たな」対抗運動を構想・構築すること、これが求められているのではないでしょうか。

大阪市立大学 教員
島　和博